関連学会印象記

第48回日本胸部外科学会総会

山本文雄

本年度の日本胸部外科学会総会は1995年10月3日から5日までの会期で，東京大学胸部外科教授古瀬　彰教授の指揮のもと東京新宿の京王プラザホテルにて開催された．物事の発展の時代を「作曲の時代」，発展がプラトーに達した時代を「演奏の時代」と呼ぶことから現在の胸部外科の実状を鑑み，会長は本学会の本年度のテーマを「演奏の時代から新たな発展を求めて」とされ，種々の企画が試みられた．古きを訪ね新しきを知るという意味から，The Johns Hopkins School of Medicine のVincent L. Gott 教授の講演が企画され，心臓外科の歴史を振り返り，その発展の軌跡が詳細に紹介され，これから心臓外科学を専攻しようとする若い諸先生方に感銘を与えたものと感じた次第である．さらに，会長自ら「演奏の時代から新たな発展を求めて ― 再手術から学ぶもの」と題して，再手術における問題点，苦労等を紹介しながら，これらから得られた知見を将来に生かそうとする会長自身の努力が伺え，本会のメインテーマに相応しい内容であったと思われた．

教育講演は Hammersmith Hospital の Kenneth M. Taylor 教授の“Inflammatory response to cardiopulmonary bypass”及び愛知県がんセンター研究所の高橋　隆先生の「肺癌の分子病因解析とその応用」の二つが企画され，教育講演としては非常に内容の充実したものであった．特に，Taylor 教授の講演は chemical mediator の推移等から cardiopulmonary bypass 時の生体の反応が炎症反応と類似の反応と捉えられること指摘し，その特異性を把握し体外循環後の各種臓器障害の軽減に向けたこれまでの成績を紹介して戴いた．これは比較的新しい概念から生体反応を捉えたもので，学問は着実に進歩していることを clear に指摘した講演であった．高橋　隆先生の講演も同様に，遺伝子レベルからの肺癌の病因解析のアプローチであり，臨床医にとっては難解の感をもつに至ったが，近い将来臨床医にとっても応用してゆくべき領域と考えられた．

招請講演は3題行われ，Massachusetts General Hospital の Cary W Akins 教授による“Reoperative Myocardial Revascularization”，Green Lane Hospital の Alan R Kerr 教授による“Use of Allograft Valves for Cardiac Reconstruction”，The Wakabayashi Institute at Irvine Medical Center の Akio Wakabayashi 教授による“Thoracoscopic Laser Pneumoplasty in the Treatment of Advanced Emphysema: An Analysis of the First 1000 Patients”が行われた．Akins 教授の講演では，reoperative myocardial revascularization の頻度が増加し，その手術成績は初回手術時より劣り，その原因として患者の高齢化，末梢血管疾患の合併頻度の増加，初回手術の際の graft の数の増加，reoperation までの期間の延長等に始まり，術前の IABP 使用頻度等種々の risk factors の指摘がなされ，さらに心臓カテーテル検査から得られた造影所見から，left main coronary disease の増加，心機能の悪化，graft の病的変化の進行が指摘され，これらに対する再手術時の実状が報告された．しかしながら，これら risk factors の増加にも関わらず，着実に手術成績向上が得られており，詳細な分析による成績悪化の原因の把握がなされ，着実な対応により手術成績を向上させている事が感銘深かった．

Kerr 教授の講演においては，Green Lane Hospital の allograft の使用経験が紹介され，その中で homograft の使用経験からその利点，適応，及び小児心疾患への応用等が述べられ，日本においてはこの領域は発展途上であり，大いに参考になる講演であった．また Wakabayashi 教授の advanced emphysema に対する laser pneumoplasty の1000例に及ぶ豊富な経験，及びその優れた臨床成績は日本のこの領域を志す臨床医に魅力的に映ったと信じる次第である．

シンポジウムは「非小細胞原発性肺癌の術後遠隔成績向上への展望」，及び「後天性弁膜症手術の遠隔成績と諸問題」の二つが企画され，日本を

国立循環器病センター　心臓血管外科

Presented by Medical*Online

代表する施設のみならず，第一線の病院からも演題が採択され，きわめて活発な討論がなされ意義深いものがあった．特に，後天性弁膜症手術に関しては，大動脈弁膜疾患においては，術後遠隔期に遷延する左室肥大は収縮，拡張機能の障害を伴い，運動耐用能低下に大きく関与すること，僧帽弁疾患においては，IE，広範囲逸脱症例に対する弁形成術の工夫が，臨床成績を大きく向上させたこと，さらに弁置換手術においても，弁下組織温存による弁置換は遠隔期の心機能を良好に維持するのに有用であり，さらにこういった後天性弁膜疾患患者の術後遠隔成績に及ぼす因子を，数千例の解析から明らかにし，早期手術，合併術式の選択，代用弁種の選択が大きく関与するとし，今後の治療戦略の構成に大きく寄与したものと思われた．

パネルディスカッションにおいては「胸腔鏡下手術の最前線」，「集学的治療による食道癌手術成績の向上」，「技術的困難症例における冠状動脈バイパス手術」が企画され，胸部外科３大領域それぞれから，今後の展望を示唆する内容が紹介された．

会長推薦演題は10題が披露され，胸部外科領域の最先端の研究が紹介されたが，今後の研究領域における動向が clear に述べられ，これらの研究成果が近い将来臨床に応用され，臨床成績の向上に寄与する可能性が示されたことは大いに意義深いものであった．

その他，ビデオセッション，一般演題も同様であり，会長の方針として34％の採択率に止まった反面，high level の演題が目白押しであり，さらにこれらが特別企画に圧迫されず，ほとんどの演題を聞くことができたことは有意義であったと感じられた次第である．

冒頭に紹介した如く，東京大学胸部外科の古瀬彰教授の企画，指揮のもと，「演奏の時代から新たな発展を求めて」というメインテーマは，特別企画を中心に，興味深く達成せられ，来年の胸部外科学会への大きな「刺激」となって10月５日に成功裏に幕が下ろされたと感じた次第である．

Presented by Medical*Online